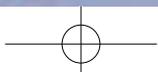
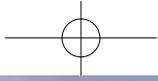
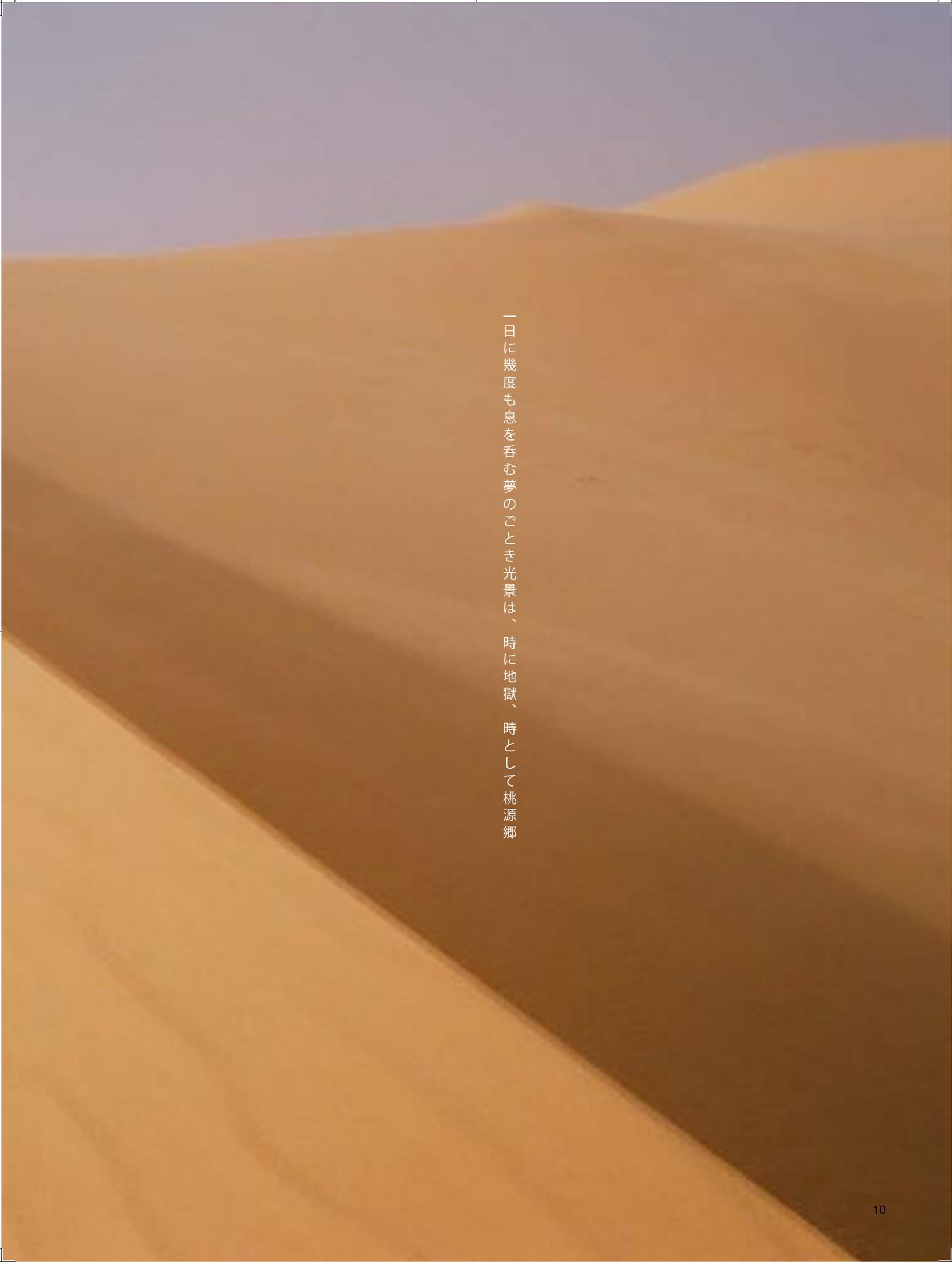
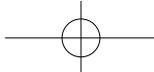


サハラ砂漠で千年続くラクダの旅

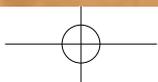
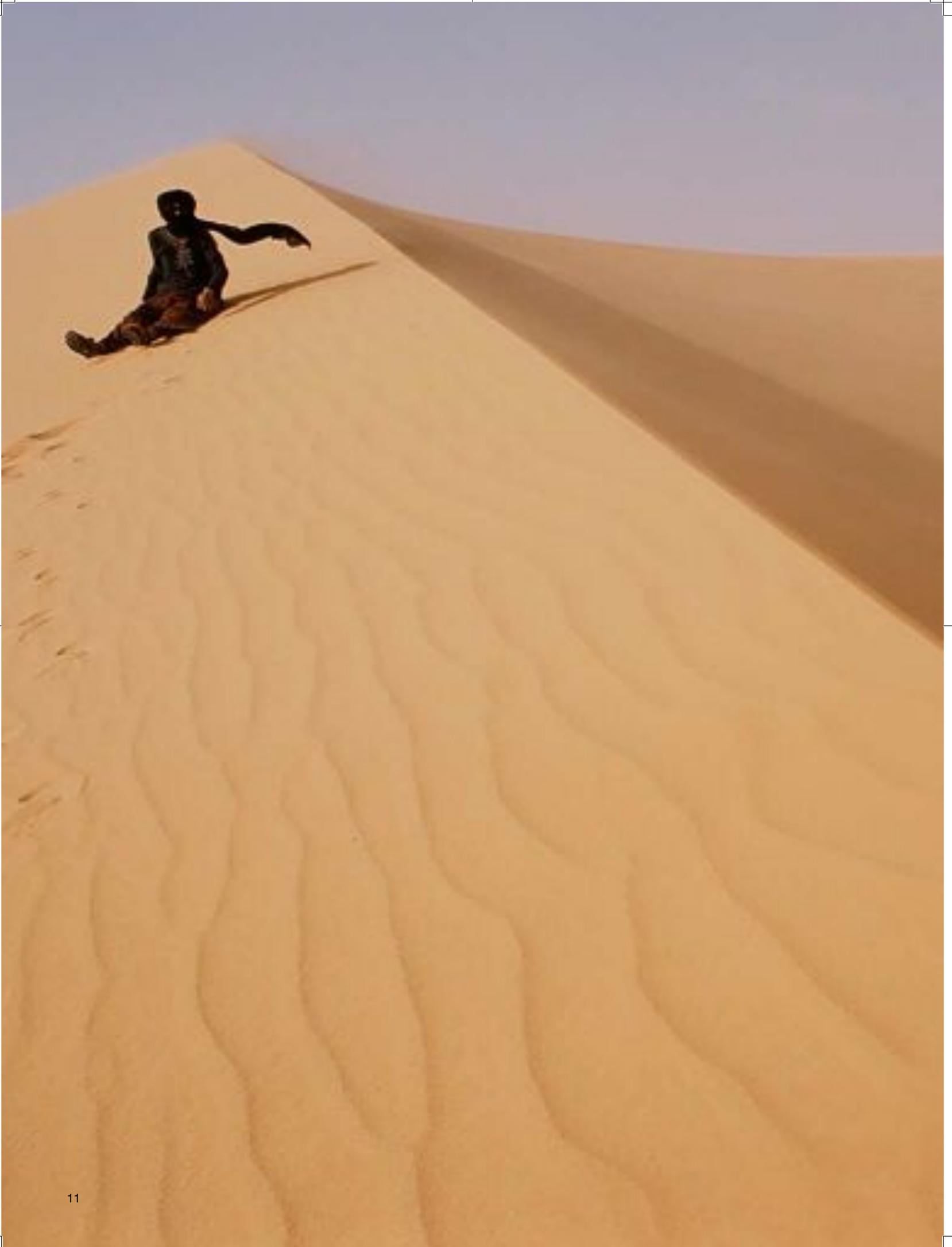
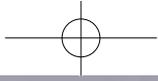


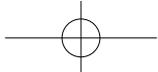


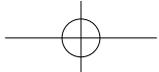


一日に幾度も息を呑む夢のごとき光景は、時に地獄、時として桃源郷









ふうふうたり、ラクダのキャラバンと歩いた二週間



特集：サハラ／アルジェリア・ジャネット

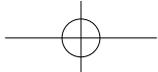
月の砂漠、千年の旅

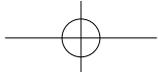
砂の海をゆく艦隊

率いるは遊牧の民、トゥアレグ

ラクダのキャラバンと歩く旅

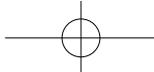
文・写真 © 池田伸
photographs and text by Shin Ikeda





さあ俺の人生よ、
壮大なヒマつぶしであれ





ウエルカム・トゥ・サハラ

アルジェリア・ジャネット空港、深夜一時。フランスはパリ・オルリー空港から到着したのだ、ここは国際空港、まごころことなきインターナショナル・エアポートである。

がしかし。滑走路脇にボツリ建つかにも古びたコンクリート平屋の建物には管制塔もなく、制服姿の係員もおらず、入国ロビーに入ると教室ほどの広さもない。国際空港として間違いなく世界最貧クラス、蛍光灯数本の薄暗さが寂しさをそそる。

しばらくすると中年男がやって来て、おもむろにカウンタに座った。勝手知ったるアリサが真ん前に陣取ったおかげで入国審査が一番乗り。気が付いた数十人の客たちがあつと言う間に長い列を作る。

無論パソコンなどない。浅黒い入国審査員（というよりどう見てもご近所のおっさんだ）はギョロリとした目でパスポートと顔を何度も見比べ、ゆるゆると書類を眺め、裏返してさらに眺めて、ドンツ、とスタンプを押した。この調子だと列の最後は優に一時間待ちだろう。

手押し台車に積まれたグレゴリーのザックをかついでX線マシンへ。唯一国際空港の証明ともいえるそのマシンは残念ながらベルトコンベアが動かず、身振りで指示されるままボックスの奥にグレゴリーを押し込むと、向こう側のおっさんが引つ張り出した。ふうう。待合ロビーに出ると、さまざま色の民族衣装を身につけたターバンを巻いた、砂漠の男たちでいっぱいだった。

ガイドのハマニと握手を交わす。身長

190センチほどの大男。ヒザ下まである深い紫の上着、鼻まで覆ったターバン。初めて出会った砂漠の男。トゥアレグは圧倒的な存在感を全身にみなぎらせていた。

わずかな灯りに照らされたパーキングには、見慣れたトヨタのランドクルーザーが中古車フェアよろしくずらりと並ぶ。サハラ砂漠はランクル王国。20年落ちのランクルに乗り込み空港を出ると、ハマニはおもむろにアクセルを踏み込んだ。猛然と身震いするエンジン。

暗い。とにかく暗い。初めてのサハラの夜は新月、しかも雲が空を覆い星もない。ヘッドライトの光に浮かぶ範囲以外、何も見えない。隣に座る妻、美和の表情もまったく分からない。開け放った窓から吹き込む風が肌寒い。

とにかくハマニはよく飛ばす。ヘッドライトが照らすアスファルトはひたすら一直線で、対向車もまったくおらず、そうか、俺は砂漠にいるんだな、初めてそう実感した。と、その時。助手席に座ってハマニとタマシエック語のトゥアレグ語で話していたアリサの黒いシルエットが、突然振り返つてこう言った。「ウエルカム・トゥ・サハラ」

恋に落ちたパリジェンヌ

友人を介してアリサと知り合ったのは、5年近く前になる。

日本とフランスのハーフ、アリサ・デコード。豊崎はパリで生まれ育った生粋のパリジェンヌ。キュートなワガママ娘だ。

アンティーク・ディーラーの親父に連れら

れて少女時代から世界を旅し、フランスの大学で日本語を学んでトウキョウに数年住み、拠点をパリに戻してから旅した砂漠で、アリサは恋に落ちた。

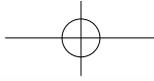
果てしない砂の海を、ラクダのキャラバンで旅するトゥアレグの民。その生き方は文明の最先端で生まれ育った我々にとって、ロマンそのものと言える。そのロマンはワガママなパリジェンヌのハートをわしづかみにした。それはきつと恋のようなものだ。

紀元前の遙か昔、地中海沿岸に居住していたベルベル人の一部が南下し、北アフリカに移住した民がトゥアレグ。7世紀前半にアラビア半島で興ったイスラム教の勢力拡大を嫌い、以来千余年、ラクダとともに砂漠で暮らす遊牧民。ノーマッドとして生きて来た。

輸送手段の発達や国による定住政策。バラボラの衛星チャンネルから流れるきらびやかなアラブの暮らしや、西洋の経済至上主義。つまり他の少数民族の伝統同様、今や淘汰される運命の真ただ中にある「遊牧」という生き方に、トゥアレグは愛着と誇りを強く抱いている。しかし同時に、世界を覆う近代化。西洋化の波は、サハラにまたがるアルジェリア、マリ共和国、ニジェール、リビア、モリタニアの中でも、国家としてのシステムが進んだアルジェリアで特に激しく、トゥアレグの遊牧暮らしは過去の古めかしい文化として減少の一途をたどる。

サハラを訪れるたび消え行くロマンの現実と直面したアリサは、あることを思いついた。日本人とフランス人と呼ばびかけて、ラクダのオーナーになつてもらおう。そのラクダのキャ





ラバンで砂漠を歩くツアーをしよう。そうすれば何人かの若いトゥアレクがラクダ使いとして生きて行ける。

彼らは遊牧の暮らしを嫌っていない。むしろ憧れている男は多い。だが遊牧は生きて行けても金が稼げない、金と無縁の暮らしはさすがに無理だ。後に親しくなったコックのヨセフはある時、こう言って大きく笑った。「ノーハウス、ノーワイフ」。家がない男に嫁は来ない。

だから親しくなったジャネットのガイド、ハマことともに、アリサはパリで遊牧生活を支援する協会「サハリエリキ」を立ち上げた。

ある日、アリサを紹介してくれた古い友人が突然言った。

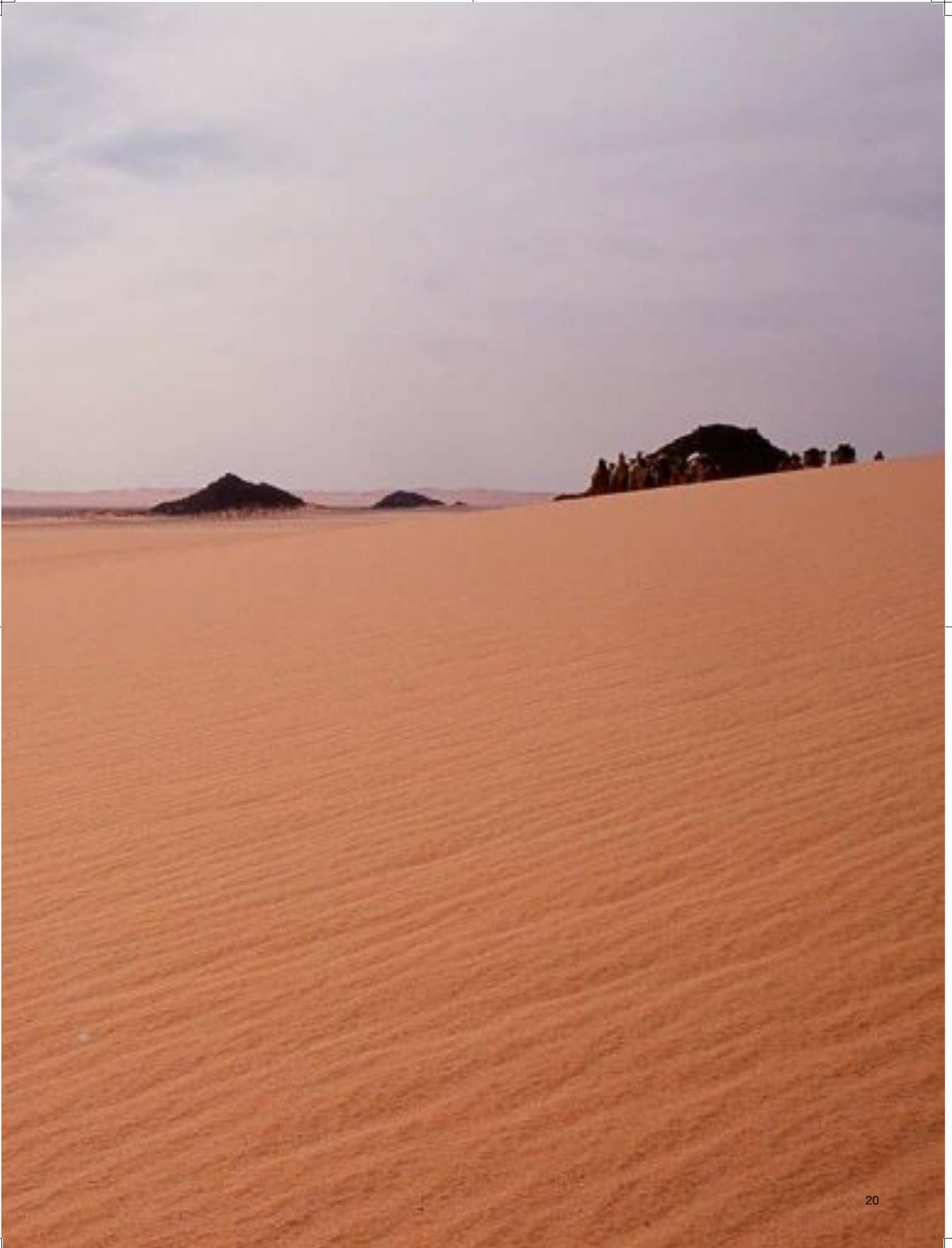
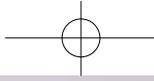
「俺さ、ラクダのオーナーになつたんだよね」
えっ、なにソレ……そこで俺はサハリエリキのことを知ったのだった。

サバクかあ。

根っからのバイク乗りである俺は、昔からパリイダカールラーに憧れていた。いつか走ってみたいという遠い夢でもあった。ラーイ、つまり競争というより、バイクの旅人としてのロマン。以来久々に聞いた「サハラ」という言葉の響きに、胸がドキンときめいた。ささやかな旅を重ねて来た俺は知っている。これが旅の呼ぶ声だ。砂漠が俺を呼んでいる。

以来数年、ようやく俺は旅立った。





俺たちは今、砂漠にいる。

ジャネットを出発し、エセンティレンと呼ばれる湧き水がある場所まで片道7日、往復2週間のラクタの旅は、野宿の旅だ。

空港を出たランクルはしばらくアスファルトの一本道を走った後に道を外れ、間もなくキャンプ地に到着した。

エンジンを止めたランクルがヘッドライトを消すと、漆黒の闇。手のひらさえまともに見えない。なにも見えないけれどその闇が途方もなく広がっていることだけは、皮膚が通して気配で感じる。新月の砂漠、闇はただ深い。バックパックから取り出したヘッドランプを点けると、なにやら岩陰に数人が毛布をかぶつてごろ寝している。

野宿の旅だ。「シユラフをもってきてね。もし TENT を張るならそれも自分で。でもたぶんいらない。砂漠で寝るのはキモチいいわヨ」と出発前にアリサが電話で話したとおり。

野宿を愛する俺と一緒に5年、キャンプが好きになった美和だけ、さすがに TENT を張らず地べたで寝た経験はない。しかし彼女は不安がるどころか地面にしゃがみ「ほら、この砂、すごいさらさら！ ビーチ

の砂とぜんぜん違う。寝心地よさそうだよ」と屈託ない。

「今夜はココで寝るからね。自分たちで探せる？ まずはネドコを決めましょう」

アリサはそう言うと、小ぶりのマットレス2枚を抱えて歩きます。50メートルほど離れた岩の裏側に「ココ、イイじゃない」とマットレスを放り投げ、「大丈夫？ ミワは寝れそう？ おなかすいてない？ でもなにもないけど」と笑った。たしかに。ちよとコンビニ、というワケにもいかない。あつそうそう、と闇に消えたアリサはすぐに戻って「ハイコレ」となにかを差し出した。受け取ってランプで照らすと、かさかさ乾いたなにかの実だ。

「なにコレ？」

「ナツメヤシ。おいしいよ」

細長い実をかじると、素朴な甘みが口一杯に広がった。食感ほ干し柿に近い。へえ、ナツメヤシってこういうモノか。砂糖漬けにして干してあるんだナ。

「ちがうヨ、このまま房になってヤシの木でできる。なにもしてないヨ。熟して落ちたのをただ拾うだけ」

なんと不思議な食べ物。乾き切った砂漠では、木の実もできながら干からびている。

心地よく冷えたさらさらの砂の上にマットレスを並べて敷き、寝袋にもぐりこんで横になる。ランプを消すと真つ暗闇、すぐに眠りに落ちた。

翌朝、目を覚ました俺はあたりを見回し、息を飲んだ。

そこはまじごとなき、砂漠であった。あちこちに巨大な岩が突き出た黄土色の砂が、見渡す限り広がっていた。その広がり、は俺を圧倒した。言葉が出ない。隣で目を覚ました妻が起き上がり、うわあ、とため息を漏らす。目を見合わせて、しばし沈黙。美和が言った。

「なにコレ？」

「マジ砂漠」

ふたり同時に吹き出した。あつはつは。「ホラ、あそこにラクタがいっぱいいるよ」。あつはつは。「夜中に目を覚ましたら空が白くなるくらい星で埋め尽くされていて、あれつアタシ何でプラネタリアムにいるんだろうって、しばらく考えちゃったよ」。あつはつは。そう、俺たちは今、砂漠にいる。サハラだ。なぜかわからないけどとにかくおかしくて、ふたりで大きく笑った。

これぞキャラバン、 さあ行こう！

時に400頭ものラクダに塩やナツメヤシを積み込んでキャラバンを組み、砂漠の町を交易する「旅の民」。トゥアレグはラクダと共に生き暮らす慎まじやかな遊牧生活を、1000年以上も営んできた。

ラクダは貨物車であり家用車であり、奴隸のように働く家畜であり、旅の相棒であり友であり、財産であり貯蓄であり、つまりトゥアレグにとってかけがいのない存在である。100キロを超える荷物を担いで1日16時間歩き続け、水は週に一度、日がな一日粗末な枯れ草をほりほりとうまそうに食む、愛すべき哺乳類偶蹄目。

いよいよ旅が始まる。

サハラエリキのキャラバンは、ラクダが13頭。ガイドのハニ、ラクダ使いのムサとアベ、コックのヨセフ、4人のトゥアレグ。アリサと俺と美和。9頭のラクダに荷物を積み、4頭のラクダに鞍を乗せ、さあ、ついにジャネットのキャンプ地を出発だ。

7人／1週間分の食料と水、食器に調理道具、プロパンガス。たくさんのマットレスや毛布。各人の荷物。コブをまたいで両脇に山ほどの荷をくくられたラクダたち。

ダレにする？ とアリサが聞く。誰でもいいよと答えると、アリサはしばらく考えたあげく「じゃあシンはコートレットね。ミワはラクダ。わたしはハコにしよう」とそれぞれに手綱を渡した。ラクダは多くが白、しかしコートレットはグレーがかかった毛並みに派手



なアクセサリをドレッドヘアのようにぶら下げた鞍を積む。カラダもひときわ大きく、俺は一目で彼を気に入った。

サハラエリキのラクダは、アリサが考案した「オーナープラン」に賛同する日本とフランスの人達がお金を出して買ったものだ。オーナーには命名権があたえられ、すべてのラクダに名前が付いている。コートレットはフランス人であるアリサの親父さんのラクダ。意味はカツレツ、つまりフランス料理のビーフカツ。娘の始めたツアーに参加した食い道楽の親父さんは、砂漠の単調な食事にへきえきして、とにかく猛烈にカツレツが食いたかったらしい。美和のラクダは「ラクダ」、犬に「イス」と名付けるようなものだ。アリサのハコは前述の古い友人夫妻がオーナー、山崎ハコのハコ。

タナカ、昌彦、ハルヒコ、ミクト、ポップ、ラッキー、アメノカル王様……ラクダ使いがビュイヒユイッとかすれた口笛のような合図を送ると、長い手足を器用に踏ん張って次々に立ち上がった。

デ、デカイ。キリンほどではないにしろ、牛や馬より全然でかい。4本足の動物では圧倒的な大きさ。荷物ラクダは鼻にくくった手綱でつながれ、先頭をラクダ使いが引くと一直線に整列して歩き始めた。オオッ、これぞキャラバン。

よし、俺も行こう！



とはいえどーやって乗るんだ？
ふと見ると、アリサはすでにハコを引いて歩きだしている。

エッ、歩くの？

俺は美和と顔を見合わせ、とりあえず手綱を持って歩き始める。コートレットは素直に俺の後を追う。少しピッチを上げて先を行くアリサに並び、聞いた。

「乗らないの？」

「あら、もう乗りたい？ エリキのツアーは歩くのよ。午後になって疲れたら乗ればいいわ。さっ、行きましょう」

……アリサによれば、千年続くキャラバンにおいて、ラクダは乗るものというより荷物を積むもの。砂漠のトゥアレグは数千キロにおよぶ行程の多くをラクダと共に歩くのだという。サハラエリキは伝統的なキャラバンを味わうツアーなのだ。

郷に入れば郷に従え。そうなんだあ、と美和も納得している様子。よし、歩こうじゃないか。さあ行こう、コートレット！

足を踏みだし、視線を正面に向けた瞬間、うわあ、とふたたび感嘆のため息が漏れた。

黄土色の地面が隆起と陥没を繰り返しながら、見渡す果てまで広がっていた。

遮るものない大きな空は天井のような雲に覆われ、地平線の一本筋で大地と向き合っていた。

山脈のように連なる岩の大地が、視線の彼方にかすんでいた。

コートレットはその長い足を交互に振り出し、一歩一歩、砂を踏み締めるわずかな音を立てながら、柔順に俺の後を追う。前方ではムサが引くラクダのキャラバンが、一糸乱れぬ一列縦隊で進んでいた。

そのすべてが、サハラだった。全身にぞわぞわと鳥肌が立った。俺は今、妻とふたり砂漠にいる。

ここは海だ。

動かぬ波が押し寄せる、乾き切った砂の大海原。

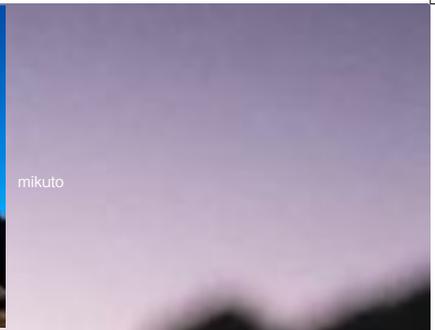
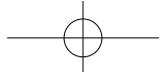
とどこどころ砂から顔を出す巨岩は浮かぶ島。

遊牧民の千余年の暮らしを支え、人を生かす母なる海。人の命などたやすく飲み込む悪魔の海。

その真つ只中に行くキャラバンは艦隊。恐れることなく大海原を自在に駆ける、無敵のラクダ艦隊。今、俺たちはその一員だ。

嗚呼サハラよ、旅よ、この星よ！

今俺たちは、地球の真上に立っている。



Syunichi

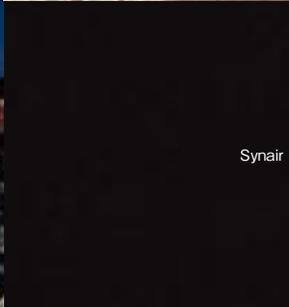
ヨセフ

mikuto



ハマニ

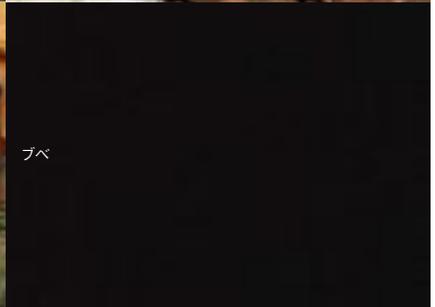
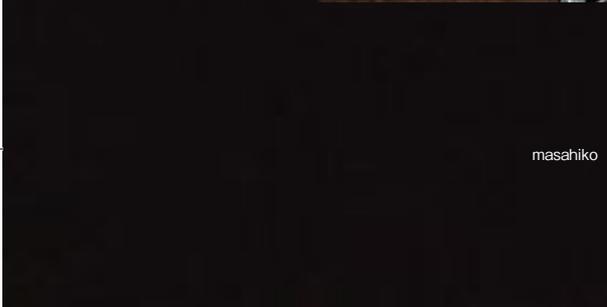
amenokal



Lucky

Synair

rakuda



masahiko

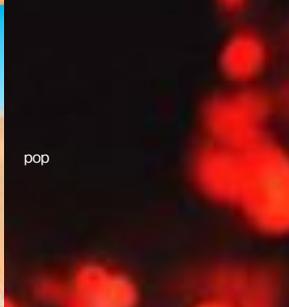
ブヘ



haco

Tanaka

solomon



pop

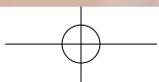
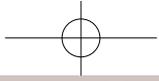
kotelet

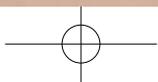
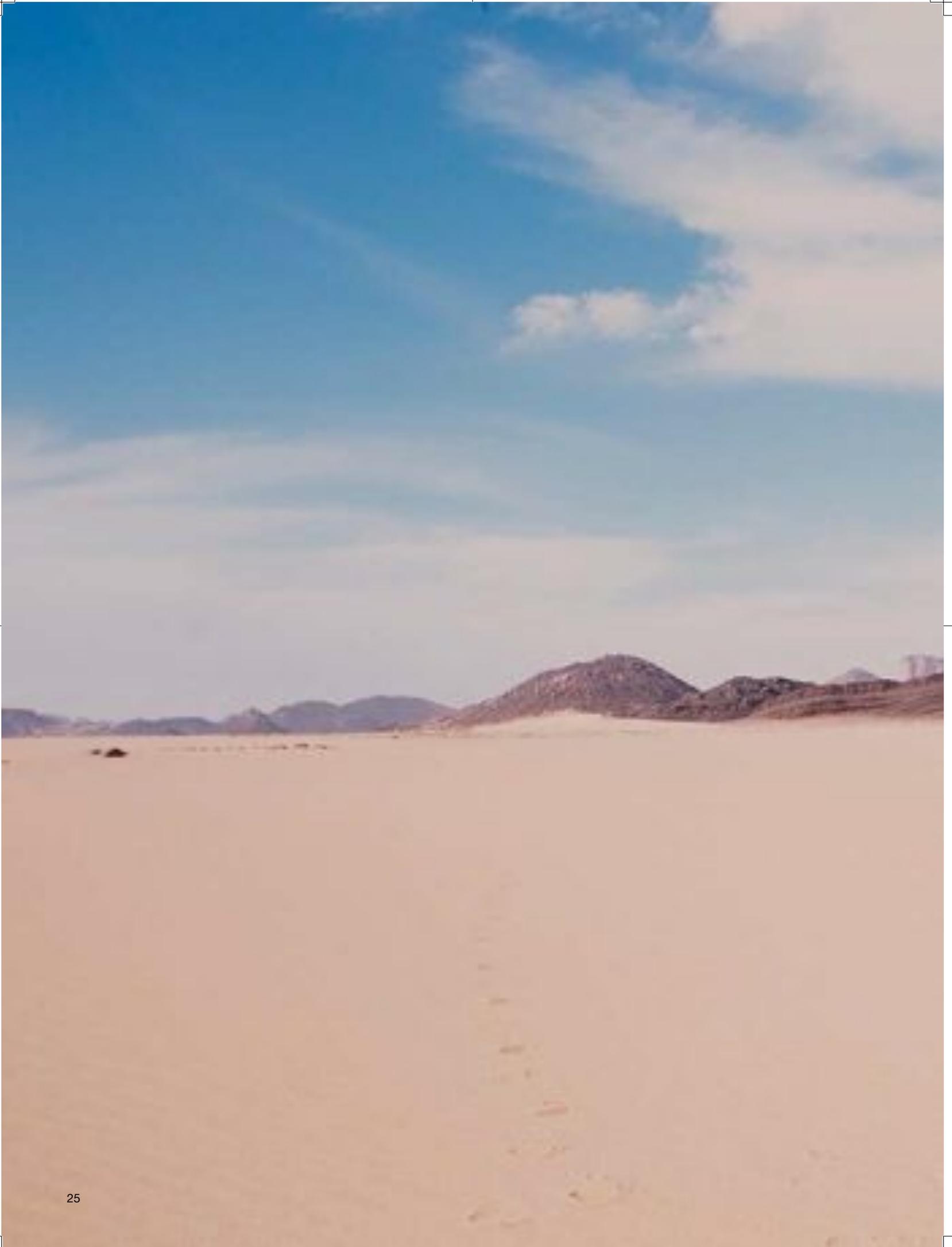


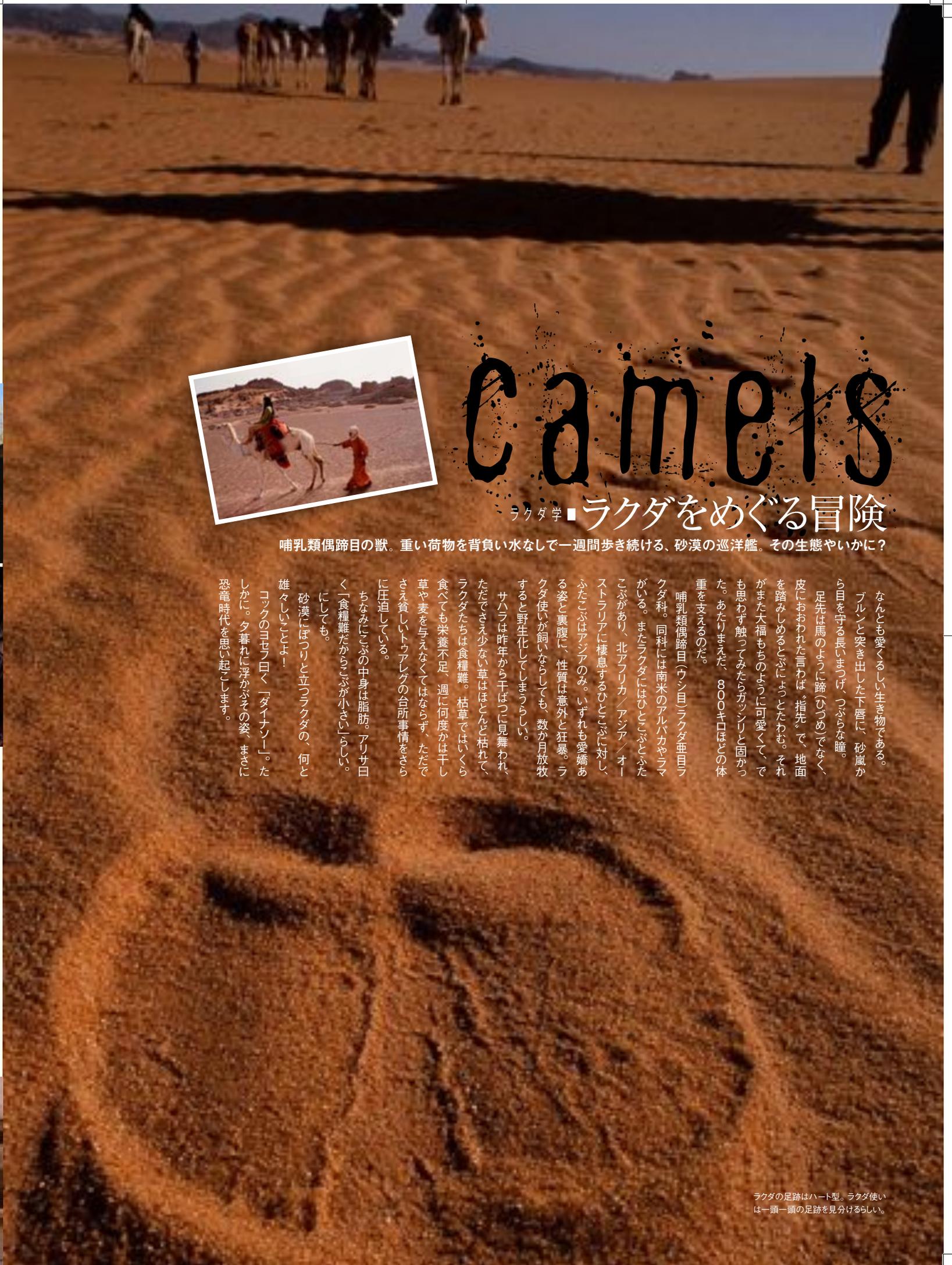
ムサ

Photograph by Allisa Decotes-Toyosaki









Camels

ラクダ学 ■ラクダをめぐる冒険

哺乳類偶蹄目の獣。重い荷物を背負い水なしで一週間歩き続ける、砂漠の巡洋艦。その生態やいかに？

なんとも愛くるしい生き物である。ブルンと突き出した下唇に、砂嵐から目を守る長いまっげ、つぶらな瞳。足先は馬のように蹄(ひづめ)でなく、皮におおわれた言わば、指先で、地面を踏みしめるとぶによつとたわむ。それがまた大福もちのように可愛くて、でも思わず触つてみたらガツシリと固かった。あたりまえだ、800キロほどの体重を支えるのだ。

哺乳類偶蹄目(ウシ目)ラクダ亜目ラクダ科。同科には南米のアルパカやラマがいる。またラクダにはひとこぶとふたこぶがあり、北アフリカ/アジア/オーストラリアに棲息するひとこぶに対し、ふたこぶはアジアのみ。いずれも愛嬌ある姿と裏腹に、性質は意外と狂暴。ラクダ使いが飼いながらも、数か月放牧すると野生化してしまうらしい。

サハラは昨年から干ばつに見舞われ、ただでさえ少ない草はほとんど枯れて、ラクダたちは食糧難。枯草ではいくら食へても栄養不足、週に何度かは干し草や麦を与えなくてはならず、ただでさえ貧しいトウアレグの台所事情をさらに圧迫している。

ちなみにこぶの中身は脂肪。アリス曰く「食糧難だからこぶが小さい」らしいにしても。

砂漠にぼつりと立つラクダの、何と雄々しいことよ！

コックのヨセフ曰く「ダイナソー」。たしかに。夕暮れに浮かぶその姿、まさに恐竜時代を思い起こします。

ラクダの足跡はハート型。ラクダ使いは一頭一頭の足跡を見分けるらしい。



お昼寝中のらくだ。馬が立ったまま寝るのに対し、らくだの寝姿はご覧のとおり。足を折ってしゃがみこみ、さらに長い首を地面にぴったりとくっつけた状態。すっかり弛緩してますね。砂漠にはらくだの天敵となる肉食獣がないため、このように安心してリラックスした姿勢で睡眠するようです。



荷物を積むには専用の荷鞍を使う。鞍を置いて固定し、マットレスや毛布をかぶせ、その上から左右にぶら下げるように荷物を積んでいく。バランスが悪いと歩きづらかったり、蔵がすれて肌を傷めるため、ラクダ使いはこの作業を意外と慎重に行ないます。



お食事の方はウンチに関する話題で失礼。草食ラクダのウンチ（というか糞ですね）はぼろぼろと固く乾いて、匂いはまったくなし。草を食べながらぼろぼろ、あるきながらぼろぼろ、広い砂漠のいたるところに、このぼろぼろウンチがコロコロと。

ちなみに下の写真、一番小粒がヤギのウンチ（麦チョコ大）、中がらくだ（かりんとう大）、一番大きいのがロバ（サーターアンタギー大）。ロバは人間より背が低いので、ウンチの大きさは体の大きさとは無関係と推測されます。



一週間は水を飲まず歩き続けるラクダは砂漠の舟。ラクダ使いたちはとてつもなく広いサハラの水場を知っており、それをたどりながら旅をします。写真はエセンディレンの井戸。砂を掘ってビニールシートをかければ簡易水飲み場の出来上がり。ジャネットを発って一週間ぶりの水、すごい勢いでイッキ飲み。その量は80リッターにも達するらしい。飲み終わればお腹はパンパン、まさに破裂寸前!



背が高く重く足の長いラクダは、立ったり座ったりが一苦労。その立ち方はこの通り。

①まずは体重を前にかけて前脚でヒザ立ち。②次に体重を後方に移動して、うしろ脚を伸ばす。③そして前脚を伸ばす。

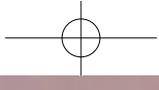
その姿はまさしく「どっこいしょ」という感じ。地面にふれる胸やヒザ、肩の部分には毛がなく、肌がタコのように固く角質化しています。

鼻に穴をあけて通したフックに結んだ手綱はハンドル。右に引けば右、左に引けば左、後ろに引けばプレーキ。アクセルは足の裏で長いうなじをグイグイと押してやる。運転は意外と簡単です。

キャンプ地に到着したら手綱を外し、前足をロープで結ぶ。これは逃亡防止。こうしておくラクダは小股でちょこちょこしか歩けないため、エサ場は自分で探せるけど、遠くまでは逃げられません。

でも中にはこの状態のまま、前日に水を飲んだキャンプ地まで何十キロも戻ってしまう猛者もいるようですが。





天国と地獄の狭間で揺れる

「コレって修行？」

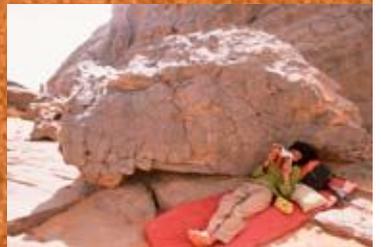
ラクダを引いて隣を歩く美和が言った。途方もなく広いサハラをとぼとぼ歩いていくと、たしかに、言われてみればコレは何かの修行かという気分だ。

「うまいコト言うね、そのとーりかも。で、ナンの？」

美和はフフッと笑って何も答えず、前を向いて歩き続ける。2日目まで曇った空は翌日から晴れ上がり、いくらターバンとサングラスで覆っていても、その顔はあきらかに陽に焼け始めていた。

朝起きて朝食を済ませ、荷造りして数時間歩く。昼飯を食べ、お茶を飲み、昼寝をし、荷造りして数時間歩く。時々ラクダに乗る。お茶を飲んで晩飯を食い、寝る。以上。俺たちがキャラバンで過ごした2週間を言葉にすれば、これがすべてだ。

この上ない単調な日々。シェフ同行の旅だから、客人は何もすることがない。起きればコーヒーとトースト、バターとジャムの朝食がすでに整い、到着するやカーペットが敷かれ、リビングが用意され、シェフはすぐさま調理を始め、火が焚かれお茶が回され、俺たちは



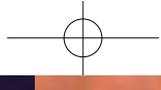
いえ、と歩く以外の時間、ただゴロゴロしているだけで万事つがなく進行して行く。あの意味せいたくと言えなくもない。

まったくもって、変わり映えない日常。砂漠に流れるこの上なく贅沢な時間しかし、裏側から見れば退屈極まりない地獄へと姿を変える。

気温30度、直射日光は50度近く、歩いていけば灼熱の太陽から逃れる術はない。ゆっくりとしたペースだから体力的に辛いわけではないが、ラクダを引いているから自分の都合ばかりで休むわけにはいかず、どこまで行くかも知らずジリジリと陽に妬かれながらただ数時間歩き続ける行為は、精神を消耗する。

今日は、ずいぶん長く歩くな。キャンプ地はまだか……たとえそんなふうにも考え出すと、ゴコロに灰色の雲が湧き、見る見る気持ちを覆っていく。時計がないから今何時かもわからない。何で今日はこんなに歩くんのだ、そろそろ休みたい、だいたいなんで鞍があるのに歩くんのだ、おいおいもういいかげん今日はいいだろう……声にならない悪態をつく。ささいな嫉妬と行き違いで仲たがいがいたままの友達を思い出して愚痴を言い、うまくな進まないトウキョウの仕事を考えて憂鬱になる。視線は落ち背は丸まり、靴擦れの足はいつになくズキズキ疼き、くっそう砂漠め、ペーを落とそうとするラクダの手綱を強く引っ張り、足元だけを見つめてただ歩く。





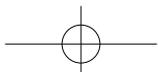
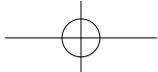
天国と地獄はおんなじ場所

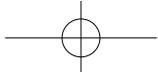
ふう、何やってんだ、オレ。ふと足を止め振り返る。西に傾き色づきはじめた砂の大地、圧倒的なその美しさにまた息を呑む。地獄が天国に変わる瞬間。ココロを覆った雲がさあっと晴れ渡り、砂漠の陽光が降り注ぐ。

横を見て「うわあ」、大きな砂丘を越えて広がった眺望に「はああ」、振り返って「うへえ」、夕暮れに染まる空を見て「ふわあ」、一日に何度も感嘆のうめきが漏れる光景。我に返る俺。

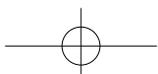
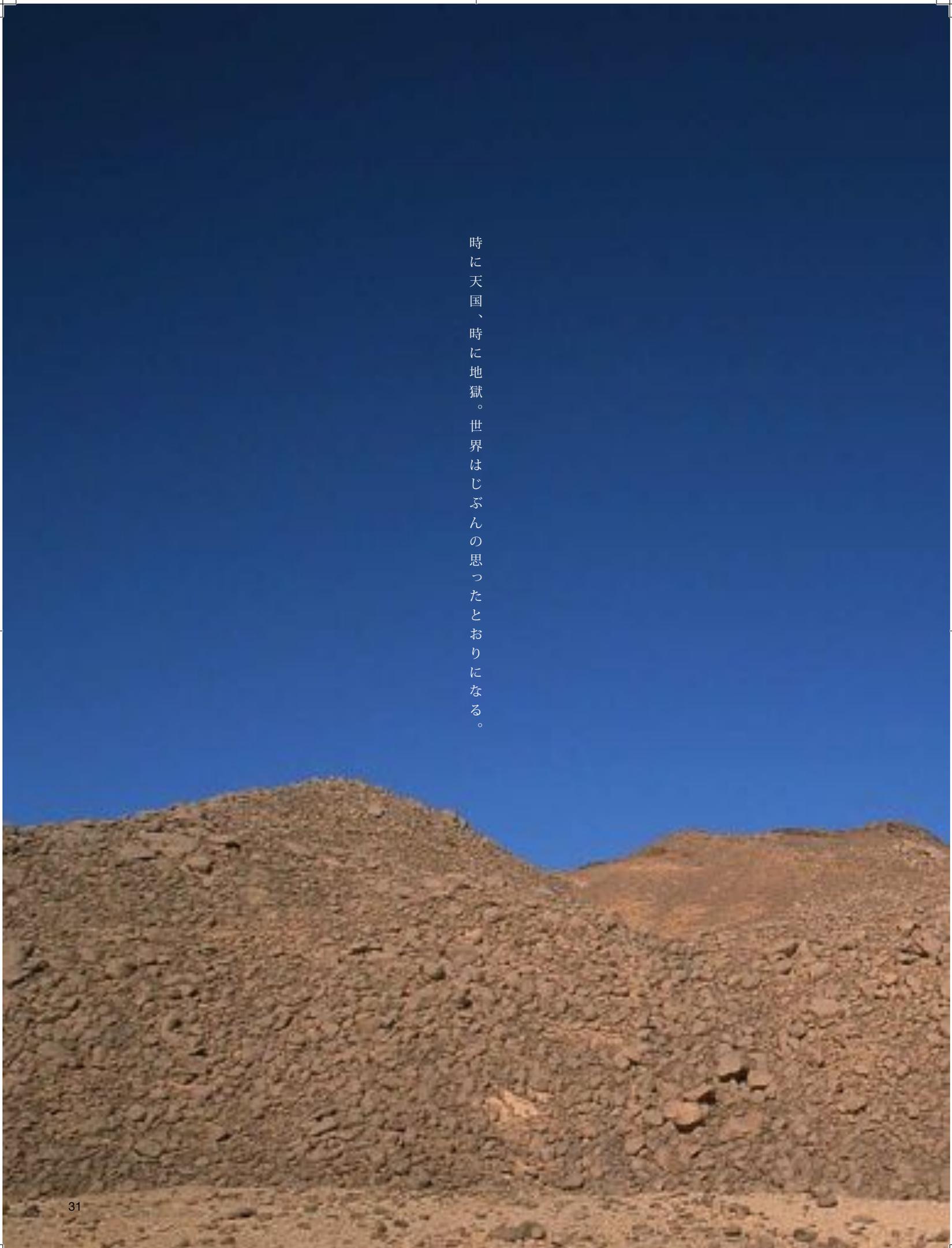
天国と地獄はおんなじ場所だ。それはじぶんのココロが決める。こちらから見て良いと言ひ、裏から見るとは嫌いだと言ひ。おんなじものにもかかわらず。時に天国、時に地獄。世界はじぶんの思ったとおりになる。

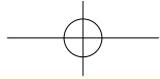






時に天国、時に地獄。世界はじぶんの思ったとおりになる。





Meal & Tea

砂漠の食学 ■ サハラの食卓

ご覧あれ、この豪華な食事を。サラダ、クスクス、レモネード、しかし旅も1週間を過ぎるころには……



トゲラ、驚きの砂蒸しパン

初めて見たときには目を疑った。
ムサは焚火の脇で洗面器のようなホーローのボウルを取り出し、ヤギ革の袋に直接入った小麦粉＝セモリナ粉を少しずつ水を加えてこねる。しばらくするとそれは真っ白いふわふわの生地になる。
ムサはおもむろに燃え盛る薪を横に掛け、熱い砂の表面を木の棒でなでるようにくぼみを作ったかと思うと、ふわふわの生地を洗面器から取り出し、器用に少し丸く伸ばしたかと思うと砂のくぼみにポフッと放り投げたのだ！
うわっ、と驚く俺と美和を尻目に、生地に砂をかけ、除けた薪をその上に戻したのだった。
トゲラ。これぞ千年以上にわたる砂漠の民の主食、「砂蒸しパン」である。
薪をよけてパンを取り出し、表面を指でコンコン叩いて焼け具合をチェック。ひっくり返して砂に埋め、しばらくしてふたたび取り出すと、表面についた砂や焦げをナイフでガリガリと削ぎ落とし、トゲラ、これにて完成！ おそろおそろ一かけらつまんでみると、おおっ、まさにパン。ほんのり効かせた塩味と表面のカリカリがあいまって、実に美味なり。
ちなみにトゥアレグはこれをパンとして食べるのではない。たっぶり時間をかけて細かくちぎって洗面器いっぱいにして、そこに薄いトマト味のスープをかけてグジグジとかきまぜ、それを囲んでみんながスプーンでつつく。これがトゥアレグ流パン粥。
時にはぼろぼろ折ったスパゲティを煮込んだスープをかける場面も。炭水化物に炭水化物をかける荒業、ちなみにこれも美味でした。蛇足ながらトゲラちぎりを手伝おうとした俺にムサはこう言った。
「手を洗い」
砂漠人に衛生を諭される俺、本当に文明人なのでしょうか？





砂漠を代表する菓子、ナツメヤシ。どう見ても乾物にしか思えないが、ヤシの木になって、熟して落ちた状態がコレ。いやはや不思議な食べ物です。毎日のお茶の時間には、素朴なビスケットとピーナッツが並びます。



1杯目は人生の様に苦く
2杯目は愛の様に強く
3杯目は死の様に甘美

修行のような旅である。つらいかつらくないかと問われれば、つらいとしか言えない旅である。歩くことは我慢できる。ジヨギングするわけではない、ゆっくり歩くだけだから、体力的にきついわけではない。問題は「食」。

シェフ同伴の旅である。三食昼寝付きの旅。朝はフランスパンとバター、ジャム、コーヒールか紅茶。昼は山盛りのサラダ。夜はスープと煮込み料理。ここが砂漠の真つただ中であることを考えれば、警戒極まりない旅である。

が、しかし。考えてみてほしい。このメニューがひたすら毎日繰り返されるのだ。味付けの基本は缶詰のトマトペースト。薄いつマト味のスープ、肉片の浮かんだ薄いつマト味のシチュー、薄いつマト味の野菜煮込み。3日目にして早飽き

た。らくだに積んだ荷物がすべて。もう結構と言ったところでほかに食うものはない。歩き続けるには食わなきゃいけない。一週間ではとほとほとんざりして、でも10日を超えるともうどうでもよくなった。

パリに戻って真つ先に食べた、パティスリーのシューウインドウで光を放つシュークリーム。バクリとかじりついたら口の中がジンとしびれて、恥ずかしながら涙が出た。嗚呼修行の旅よ！

お茶はトゥアレグの日常に欠かせない。朝、昼、夕、晩、焚火を起こすと必ずお茶が供される。中国茶の葉を焚火でぐらぐらと出し、砂糖をたっぷり入れ、小さなガラスのコップに高い所から注いで泡立たせたトゥアレグ・ティーは、同じ葉で3杯飲むのがお約束。

「1杯目は人生の様に苦く、2杯目は愛の様に強く、3杯目は死の様に甘美」と称されるこのお茶は、まさに砂漠の文化。すっかり気に入った俺は茶葉とホーローのポットとコップをお土産に買って帰ったのでした。でも自宅のガスコンロで沸かしたトゥアレグ・ティーは、砂漠の味とどこかが違う。ああ、あの味が恋しい！

サハラに死した青年の話

「サハラに死す、読んだ？」とアリサが聞いた。読んでないけどタイトルは聞いたことがある。どんな話？

カミオンユタカシという22歳の若者が、単独によるサハラ砂漠横断7000キロに挑み、一度は失敗して再挑戦し、遺体で見えられた。彼がつけていた日記をまとめたストーリーだとアリサは言った。1970年代前半のノンフィクションである。

高校を中退し世界をバックパックで放浪後、ラクダ一頭にわずかな荷物を積み、当時まだ誰もなしてないなかったサハラ横断に旅立った日本人青年、上温湯隆。

「すごい面白かった。でも腹立ったよ、ちょっと無謀すぎる。ラクダは群れで歩く生き物だから、一頭なんてありえない。トゥアレグだってやらないよ。しかも一度ラクダが死んで失敗したのに、おなじミスメイクでカッシした。バカだよ、彼は」

バカだよ、彼は。アリサのその言葉には、時代や性別を超えた同胞への理解と想い、そして怒りが入り混じっていた。

カッシは渴死。初めて聞いたその言葉が重く響いた。この広大な砂漠でひとり道を失い途方にくれ、夢半ば、干からびて死んでいく。そのことを思うといたたまれない気持ちになった。しかも22歳の青年だという。もし俺だったら……思わず想像してあたりを見回し、ぶるぶるアタマを振って打ち消した。リアルにちよつとコワイ。

ハマヤムサにとつて、砂漠は庭。無敵のラクダ艦隊の一員である以上サハラは恐れるに

足らず、ただその美しさのため息を連発しながら歩き続けるだけでいい。(ある意味)優雅な旅。

一週間歩き続けてエセンディレンに到着した。両脇を岩山に囲まれた谷で、一番奥に雨水がたまった泉があり、水浴びできるのだという。うーん、一週間ぶりの入浴！美和は心底うれしそうだ。

キャンプ地に荷物を降ろし、入浴道具を持ってラクダとともに歩き出した。なんだかラクダたちの歩みが速い。「ラクダは分かっているんだよ、水が飲めること。アタマイいネ」とアリサ。一週間ぶりの水だ、そりゃ興奮するだろう。

10分も行かないうちに、俺ははたと気がついた。あつ、いけねつ、カメラ忘れた。一週間歩いてたどり着いた神秘の泉だ、写真に収めないわけには行かない。「戻って取ってくるよ」と美和が引くラクダにコートレットの手綱を結んで引き返した。

キャンプに戻ると留守番のヨセフはいない。近くでキャンプする別のキャラバンに遊びに行っても行ったんだろう。愛機ニコンを首から下げ、再びひとり歩き出す。背の高い枯れかけた茶色の草のブッシュがあちこちに生え、見通しは悪い。

すぐに追いつくさ。しかし歩くと歩くとラクダ隊の姿が見えず、ココロの隅のほうに不安な気持ち湧き上がる。ひよつとしたら方向が違うのか？いやいや大丈夫。エセンディレンは渓谷、道に迷うワケはない。理屈では分かっている。分かっているけど……そうだ、唄でもうたおう。

月のオ、さばくをオ、はあるうげるとオ、どうやらコレは逆効果だったらしく、寂しさがイツキに増した。カミオン君も、きつこの唄を口ずさんだに違いない。サハラに死す。ああ駄目だ、そのことを今考えちゃいけない、でも昨日のアリサの話が勝手によみがえり、心臓のドキドキが高まった。カミオン君はどうしてサハラを横断しようと考えたんだろう。

しかし俺は知っていた。イン・トゥ・ザ・ワイルド。隊とわずかにはぐれただけで、一気に立ち上がる不安、孤独。彼の100分の一ほどのリアルを知つたにすぎない俺だけれども、大いなる自然にひとり挑みたいという本能は、男として、ささやかな旅人として痛いほどよく分かる。青年の真摯な悩みやひたむきな情熱、何かを成し遂げたいという熱い気持ち、無知ゆえの無謀。それは大人になった俺が失ってしまったものだろうか。

立ち止まりあたりを確認し、ブッシュをよけて前方に目を凝らす。なにひとつ動くもの見当たらず、空は抜けるように青い。まったくもつていつものサハラ。でもそこはキャラバンと一緒のサハラと、なにかが確実に異なっていた。

足を踏み出すペースが自然と速まる。10分戻ったとして、その間に隊は10分進む。つまり俺は20分遅れて歩き出した。隊の時速が5キロとして、俺が7キロで歩けば時速2キロで進むから、えーと、えーと、ああもつて計算できない！ちよつとパニックで、でもそれが分かったところでどーにもならない現実を思い出し、ひとりで笑った。そういえば水

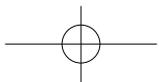
が近づく気配を感じたラクダは、さらにビッチを上げたかもしれない。いずれにしろ歩かない。

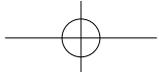
だいたいの先のブッシュの影に、ちらりと動く人影が見えた気がした。ホラ大丈夫、当たり前さ、分かりきったことさ。しかしさらに進んでも追いつかず、何も見えず、さっきのアルは気のせいだったんじゃないかやっぱり方向が違っているんじゃないかと、疑いが再び頭をもたげる。その時は気がついた。地面が輝いている。

オレの進む方向の砂がきらきらと瞬き、ブッシュをよけながら一本の筋が先まで続いていた。それは行く先を示す道のように、俺は光る道を追うように歩き続けた。

どれくらいの時間だったか、想像すらつかない。30分かもしれないし、1時間かもしれない。時計がないから時間がまったく分からない。砂漠で必要な時間の単位は朝昼夕晩の4つくらいのもので、それは太陽の位置と腹の減り具合が教えてくれる。一週間歩いた今となつては、都会暮らしの時間の概念はるか昔のことのように思えた。

いうまでもなく、まもなく俺は隊に追いついた。同じ方向に進むのだから、追いつくには時間がかかる。当たり前だ、誰だってわかる。しばらく手前でペースを落とす息を整え、何食わぬ顔で隊に合流した。「ヨッ！」と努めて明るく美和に声をかける。「アレッ、どしたの」と美和。ようやく追いついたと告げると、彼女はこう応じたのだった。「あ、そっか。そういうえばカメラ取りに行ったんだよね。すっかり忘れてた！」





いつでもどこでもそこが家

ほとんど雨が降らない砂漠では、見渡す限りすべてが家である。火を焚けばそこがリビング、寝ころべばそこが寝室。岩陰は個室。用を足した場所がトイレ。うーん、シンプル。このシンプルさこそが、ロマンの旅の入り口だ。

岩はミルフィーユのような断面で表面が段差になっているから、棚にはうってつけ。マットを引き、枕元の棚に小物を並べればそこはもう我が家。夜にはプラネタリアムよりも鮮やかな星空の天井。ウエステインのスイートに匹敵する、といえは大きいか。でも俺はそう思う。たぶん美和も。

なにかあった時のためにと(なにが?)バックパックに折り込んだ小さなテントを、2晩だけ張った。果てしなく広がる砂漠にぼつり、ふたりの愛の巣。それは鳥肌が立つくらい素敵な光景でした。



ニュージェネレーション遊牧民

えいせいけいたい、である。聞いたことはあるが初めて見た。これさえあれば、だだっ広い砂漠のどこにしようかと安心である。今やこれは砂漠をガイドするトゥアラグの必需品となっているらしい。もっとも2週間間にこれを使っている姿を見かけたのは、1度だけだったけど。



砂漠の正装

トゥアラグは男も女もターバンを巻く。彼らはイスラム教であるが、そのターバンはイスラムを意味するものではない。灼熱の陽光と砂嵐から身を守る、砂漠の民の象徴。

かつてターバンは藍染めで、皮膚に色が映って肌が青くなることから、彼らは「ブルーマン」とも呼ばれる。さっそくオイルも昔ながらの藍染めターバン(3メートル)にトライ。でもふと気づくと手は真っ青に染まり、一日歩いてターバンを外すとすっかりブルーマンに。ちなみに8メートルを巻くトゥアラグもいるそうです。

セブンイレブン来たよ!

とあるキャンプ地の屋下がり。遠くの岩陰から一人の男がこちらに歩いてきた。あれっどうしてこんなところに人が? 近くにほかのキャンプがあるのだろうか。にしても、どうしてここに俺たちがいることを知っているんだろう。しばらくすると、アリサが俺たちを呼んだ。「シン、ミフ、セブンイレブン来たよ!」

ナニゴトか行ってみると、先ほどの男が地面に座り、肩にかけたバックからなにやらモノを取り出して並べ始めた。見ると銀細工のアクセサリーだ。砂漠の行商人。聞けば彼は銀冶屋で、自分で作った銀細工をこうして売っているのだという。

うーん、砂漠の男、恐るべし。しかもそれがなかなか雰囲気のある出来、思わず数点お買い上げ。

男は満足げにうなずき、商品を仕舞ったバックを肩から下げ、来た方向とは逆の方へ再び歩き去ったのであります。



出色のドキュメント

1975年、世界初のサハラ砂漠単独に挑み、命を散らした22歳の日本人青年、上温湯隆。その若さゆえの情熱と真摯な悩み、未知なるものに挑みたいという冒険心に満ちたその旅を、日記と知人による証言で浮き彫りにしたドキュメンタリー。帰国後手に入れイッキに読んで、胸が熱くなりました。旅人必読の書。単行本(写真) / 文庫版とも現在絶版ながら、amazonなどで古書を入手可能。

ehiki-gaku

砂漠旅雑学 ■ 不思議の国、サハラ

砂漠の旅、それは我々の想像を絶するワンダリング・ジャーニー!



夕闇迫る今宵のねぐら。
さあ、今日もブラネタリウムが始まる。





月の砂漠、命の大地

2週間。シユラフに包まり砂漠に寝そべって見上げた月、ラクダを引いて歩きながら見つけた青空の月、東の砂丘から昇る赤い月、深夜に寒さで目覚めてあけた目に飛び込んだ純白の月、ふと気がつけば月がいた。新月から始まった旅で、俺たちは少しずつ大きく育つ月とともに歩き続けた。

旅の終わり、今宵は満月。高く上がった純白の月で、見渡す限り広がる砂漠が月光に浮かぶ。遠くに草を食むラクダが見えた。夢か幻か。それはまさに宇宙そのものの光景だった。俺たちの長い影が砂丘にくっきり刻まれる。手のひらさえ見えない初日の闇は、今やどこにもなかった。

月の砂漠。つまり俺たちは生まれた月が満ちてゆく一部始終を、2週間かけて眺めたつてわけか。

生命の宿らない死の大地。そう思い込んでやってきた砂漠は、たくさんの生き物が暮らす場であった。

すずめやツバメ、カラス、トビ。荒涼砂漠には鳥たちの美しいさえずりが流れていた。延々と砂丘に刻まれたスカラベ^{II}コガネムシの足跡、食^{II}ぼしたクッキーをアリが運び、ブッシュに潜む蛇、岩場にはサソリ。深夜に聞いたふくろの声。トゥアレグたちが目の色を変えて追うウサギ。ジャッカル足跡は柴犬ほどの大きさだった。フェネック^{II}キツネ、ガゼル。ラクダの背で揺られる俺のまわりを、砂漠の茶色いツバメが風にあおられながら遊ぶようにひとしきり飛び回った。

立ち枯れのような草木は砂深くまで根を張り、耐えて久しい恵みの雨を待ち続けた。干からびた枝の間で小さく花を咲かせる小さな草。乾ききった死の大地と思いついていたサハラは、生の営みにあふれる命の園だった。

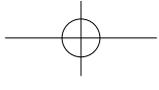
遊牧民。2週間旅をともしたトゥアレグの砂漠暮らしは、やはりロマンそのものだった。寡黙な男たちの中で唯一、饒舌で人懐っこいコックのヨセフが言う。

「ここが俺たちの家だ。ここも、あそこも、あつちも、そこも、ずーっとむこうも、どこだってすべてが俺たちの家。俺たちは自由だ！」

ウイ・アー・フリーー！ ヨセフはカタコトの英語で言い、高らかに笑った。

現実には甘くない。「でもおまえ、昨日言っただけじゃないか。ノーハウス、ノーワイフって」。たしかにその通りだ。ヨセフは大げさに顔を覆って、俺たちは大きく笑った。ヨセフもハマニもブベも、家族とともに家に暮らす。街の子^{II}だ。砂漠は自由、でも街の暮らしは楽じゃない。冗談ではなく自分の家のない男に嫁は来ない。





最もベテランのラクダ使いであるムサは、ラクダの管理人。ラクダは普段、砂漠に放牧する。放つておけば草を求めてどこまでも行ってしまうから、それを見張るのがラクダ使いの主な仕事。エリキのラクダは普段ムサが放牧している。

街に住む家族はいるが、ムサの家は砂漠だ。オールド・スクールな放牧暮らし。ヤギの皮を剥いで縫い合わせたバッグに積めたセモリナ粉とバスタ、トマトペーストの缶詰とタマネギ、塩、オイル。お茶と砂糖とナツメヤシ。いくつかの調理道具、毛布と敷物。身のまわりの物を積めた小ぶりのデイバックひとつ。つまりラクダ一頭に余裕で積めるほどの荷物。さえあれば、ムサは自分の間暮らしていられる。この雄大な、時間が止まったような眺望の真只中のでひとり、来る日も来る日も時折ラクダを見てまわり、離れすぎた一団を連れ戻し、薪を集めて火を焚き、粉をこねトゲラを焼きトマトペーストでスープを作り、茶をいれ、まれに通るかかる知人や友人と言葉を交わし、ただそれを繰り返して生き

る砂漠の男の人生を考えた。

年齢は不詳。何歳かとたずねると「分からない」とムサは答えた。「たぶん35歳くらいね。昔そんな話した気がする」とアリサは言うがあてにならない。自称30歳のハジメも「知らない」という。ハジメの親の世代は、ほとんどの人が正確な自分の年齢など知らないらしい。日焼けで皮が剥げた鼻、額や目尻に刻まれた深いしわ。もしアリサの言うように30代だとすれば、砂漠暮らしの厳しさをその表情が語る。

「ラクダ使いはほんとうにラクダが大好きなの。トゥアレグ語だから分からないだろうけど、この人たちラクダの話ばかりしてる。ほら、またラクダがどーしたって言ってるよ」

アリサが言うまでもなく、ムサにはラクダへの愛があった。いつも気にかけて、誰よりもよく見回りに出かけ、近づきすぎれば追いつ払い、世話する様子はいつも楽しげで、これが彼の人生のすべてだとしたら、それは決して悪い人生ではないと俺には思えた。ムサに嫁がないことを、アリサは家族のように気にかけていたけれど。

大きな白いパラソラアンテナを設置した家並みが続く風景は、北アフリカ名物といわれるらしい。受信するのはアラブのチャンネル。衛星を通じて数十チャンネルが放映されている。アメリカのケーブルテレビ並み。ひとつたび街に定住すれば、家族だんらんを中心にテレビが座る。世界共通の法則である。

ブラウン管や液晶画面から流れる情報の渦は幻。無垢で素朴な旧世界の住人にとって、それは輝ける未来でもある。ドラマのヒロイ

ンは派手な化粧と衣装をまとい、瀟洒な家に住み、高価な賞金を懸けたクイズ番組にスタジオが熱狂し、ハリウッド映画では人が次々と殺され、あふれんばかりの便利で清潔なモノがコマーシャルから溢れ出す。TVの前の人々は多かれ少なかれ幻を刷り込まれ、無意識に自分の暮らしをそれと比較し、知らぬまま幻の未来に憧れを抱くことになる。家を建てるのが目標となり、ランクルを買うのが夢になり、私たちの化粧は厚くなり、部屋に冷蔵庫やエアコンが設置され、そうして遊牧のような暮らしは古き良き文化として過去へと消えていく。持たざるが故の自由な日々は、所有するものが増えるほど過去に埋もれていく……





俺は知っている。俺たちはもうそれを失ってしまったことを。失った過去はもう取り戻せないことを。未来に向かう新しい秩序を作り上げるのが、いかに困難な作業であるかを。

ハマニの父親は15年ほど前に家族を捨て、マリ共和国に暮す。根っからの遊牧民である彼は、定住化政策を進めるアルジェリアを見限り、のどかな遊牧生活が変わらず残るマリに移住した。遊牧生活を続けながら今は新しい奥さんがいるという。定住する街の暮らしよりも遊牧生活をつまり家族よりも自身の自由を選んだ、ということなのだろう。ハマニはどう思っているのかな。そう聞くとアリサは即答した。

「大好きだよ。ハマニはお父さんの生き方に憧れてる。いつか会いに行きたいって言ったよ」

ジーンズを履いてランクルに乗る、観光客がムサならば、ハマニは遊牧民のニューシエネレーション。しかし世代を超えてトゥアレクは砂漠を愛し、砂漠の時に満ち満ちる自由を忘れてはいない。

旅に出る数日前のことだ。荷造りする美和とちよとした口論になった。

「10日分でしょ、どれくらい服を持ってけばいいんだろ。だいたい砂漠って何着ればいいんだか分らないよね」

10日じゃないよ、2週間だよ。俺がそう言うのと、「エツ」と美和の表情が曇った。

「アレ、10日じゃないの？ 2週間なんて聞いてない、長すぎるよ。2週間はアタシ、とでもムリだから！」

俺は2週間って言ったはずだけど。言った言わないの水掛け論を経て、「アタシもう行くのやめる」と彼女はベッドにもぐりこんだ。10日と2週間がどれほど違うのか俺には分からないけれど、それは彼女の問題だ。

確かに。砂漠に行こうと誘ってからウンと言うまで、美和はずいぶん悩んでいた。10日間（2週間！）の野宿。シエフ同伴とはいえないような食事が出るかもわからない。不安と、砂漠という未知への好奇心。葛藤を乗り越えて決断した旅立ち。3日後に出発を控え、それでも彼女の心は揺れている。そりゃそーだ、人生初の大冒険なのだ。

歩き始めて一週間が過ぎたころ、横に並んだ美和が突然言った。

「良かった。本当に来てよかった。ありがとね、誘ってくれて」

な、なに言ってんだよあらたまつて。俺はそう答えた。照れくさくて顔をまともに見れず、でもどんな景色よりその一言が胸に沁みだ。本当に来てよかった、俺も心底そう思う。ありがと。そう言うのは俺の方だ。

実際の話、美和は頑張った。歩くのに飽き飽きしてラクダの背にまたがる俺を尻目に、淡々と歩き続けた。変わり映えない食事にはとほとほんざりしつつそれを平らげ、陽焼けと乾燥でかさかさとした皮が剥け始めた顔を手鏡で眺めながら「もういいや。どーとでもして、って感じ。ヒトカワむけるってほんと、このことだネ」そう言うてけらけらと笑った。

丸2週間、目の届く範囲で同じ時を過ごす。これも得難い経験だった。彼女は強かった。砂漠の美和は俺が知る美和の何倍も強い美和だった。美和自身、自分の強さをあらためて知ったことだろう。

自分の知らない自分の強さ。足りないものを積み上げるのではなく、すでに持っているものを掘り起こすこと。強くなるということとは、きっとそういう意味だ。





歩きながら、いろいろなことを考えた。くだらないこと、大切なこと、楽しいこと、さもないこと、エロいこと。そのうち考えるネタも尽き、ただ遠くを見つめて歩き続けた。

ある日のこと。俺は歩きながら、アタマの中で字を書いていた。単調な時間をやり過ぎる暇つぶし。そして気づいた。「ぬ」が書けない。

ちよつとショックだった。漢字はまだしも、ひらがなである。しかし必死に追うほど「ぬ」は逃げ水のように遠ざかる。あ分かった、ね、いや違うそれは「ね」だ。れ、め、む、ゆ……いろいろな文字がアタマで渦巻き、やがてバラバラに分解されて、それは文字とはいえないものになっていった。ぬ。しばらくしてようやくここに行きついても、もはやそれが本当に「ぬ」なのか確信が持てない。ま、いいさ。ここは砂漠だ！

帰国して早一ヶ月。砂漠の出来事ははるか過去の出来事のように遠ざかり、写真を眺めてもあのリアルな感触は戻らない。でも、サハラを歩いた俺たちの幾万の足跡は、少しずつ砂嵐に吹き消され、しかし今もまだあの大地に刻まれているはずだ。それを思うとき、俺の人生は少しだけ豊かになる。

人生は暇つぶし。

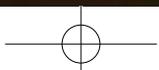
確かに、その通りだと言えなくはない。荒野でラクタと過ごすか、社会で働いて稼いだカネを消費して過ごすか。いずれにしてもその程度のものだ。果てしなく広がる砂の大地を一步一步踏みしめながら、思考停止寸前のアタマでぼんやりと考えた。

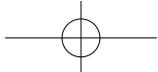
ならば、俺は願う。俺の人生よ、壮大な暇つぶしであれ！





足りないものを積み上げるのではなく
すでに持っているものを掘り起こす





強くなるということ。きっとそういう意味だ

